

は せ 出雲人形と初瀬流れ

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

近年、異常が通常になったような気象が続く。奈良は激甚な自然災害が比較的少ない穏やかな地域と思われがちだが、そんなことはない。最初に都が定められた土地柄ゆえに災害についての古い記録は多く、『日本書紀』に書かれた水害と地震の最古の記録はいずれも奈良のものである。推古天皇7年(599)マグニチュード7.0と推定される地震が発生し、日本で最初に地震の被害状況が記録されている。そのわずか2年後の推古天皇9年(601)5月、今度は大雨による河川の氾濫で、「宮殿にまで水が流れ込んできた」という記述を『日本書紀』で確認することができる。旧暦の5月なので、現在の暦では梅雨時期にあたる洪水による浸水被害だったのだろう。

“大和豊年米食わず”ということばがある。奈良が豊作ということは、天候が順調で雨も適度に降ったことを意味するが、奈良の天候が順調ということは、すなわち他の地方は雨が多くて不順な年回りだったことを示す。逆に、他の地方が豊作ならば奈良は雨不足で、干魃の年ということになる。奈良は雨の少ない地域で、さほど大きな河川もなく、水源をため池に頼っていた。江戸時代には4～5年に一度の間隔で干魃に苦しんだ奈良の人たちは、6,000ものため池を作って備えとしたが、それらはもともと田畑だったために水深が浅く、“大和の皿池”と呼ばれて保水力が弱かった。大規模なため池を作ろうにも、複雑な入組支配の権利の問題で実現には至らなかった。最後は雨乞いしかなく、「いさめ踊り」や「なもで踊り」、「火振り」などが挙行されることになる。

一方で、大水の氾濫による水害も少なくなかった。なかでも、江戸中期に発生した「御所流れ」と江戸後期の「初瀬流れ」は被害が甚大だった。奈良で今に伝わる様々な記録でも、「大水」や「洪水」という表記は多々あるが、「流れ」と位置づけられるのはこの2つである。今回、奈良の初瀬出雲人形を調べる機会を得て、現在1軒だけ残る窯元の水野家を調査したが、売買の掛帳や人形の種類などを含む記録が一切残っていないと言われた。出雲人形といえば、「出雲人形を買って帰らんと長谷寺に参ったことにならん」と称されたぐらい長谷寺参詣の土産物として人気を博したものである。江戸時代よりさかのぼるものでもなく、文化年間の書付ぐらいありそうなものと思ったが、8代目窯元水野佳珠氏は「初瀬流れでみんな流されてしまいました。記録も人形の型も」と静かに言われた。

「初瀬流れ」は文化8年6月15日(新暦8月3日)に初瀬、現在の桜井市で発生した大洪水である。大正3年11月に奈良県八木測候所が刊行した『大和風水害報文』にも様子が詳細に記録されている。「六月十五日夜五ツ時より小雨降出し同夜八ツ時頃より一時許大雨頻に降りし為めに初瀬より奈良迄の山手は殊の外大水となり初瀬にて家三十軒流れ溺死せし者六七十人あり其外に泊込の旅客十五六人溺死せり而して追分、金屋、三輪の邊は床上へ浸水し布留谷にても人家五六軒流れ丹波市村は全部床上へ浸水せり又岩屋村にても家二軒流れ櫛ノ本村にては土橋悉く流る又菩提山川の出水にて高樋村に潰家二軒と中之庄村に流家二軒あり蔵ノ庄川破堤し…」と続く。午後8時頃から降り出した雨は午前2時頃には一気に激しさを増した。短時間に大量の雨が降り、時間降水量は100ミリ程度と推測されている。このとき奈良以外には特に大きな被害の記録がないことから極めて局地的な災害となった。しかも、大雨という必ず被害が出る宮堂や吐田、窪田といった平野部は無事で、奈良盆地東縁の山間部に被害が集中したことから、

大きな川に注ぐ前に山間部で川が溢れたことが原因と考えられている。ともかく、初瀬の被害は大きく、集落全体が川のようになって死者は126名に及んだ。長谷寺の参詣者であろう「旅客十五六人」も「溺死」してしまった。出雲では上半身を地上に出し、腰から下が埋まっている地藏石仏が祀られている。「初瀬流れ」で川上から流されてきたものを地域の人が救い出したと伝えられ、「出雲の流れ地藏」と呼ばれている。なんとも目を覆うような悲惨な出来事で、これでは何もかも流されて残されていないはずだ。水野家に伝わる最古の人形の型は「天保十四年／うの三月吉日」と「山型にキ」の刻印が読み取れる。天保14年(1843)は卯年にあたる。「初瀬流れ」の被害は北に延びて、天理の布留では家が5、6軒流され、丹波市村では全戸床上浸水の被害となった。布留川の水位が上がったのだろう。「奈良山よりも多く出水し猿澤池の鯉多数流出せり奈良町も水押の為めに番所及び牢屋へ浸水し囚人等は山へ避難せしむ奈良三條の西方にて水の深さ八尺許あり」と記録が続くので、春日山からも鉄砲水のように大水が流れ出し、猿澤池の鯉までが流された。三条通の西では水が2m40cmの高さにまで達したところもある。浸水した牢屋から囚人を避難させるなど人道的な対処がとられていたことも記録からわかる。被害は奈良県東部の山沿いに広がった。

最後に、先に触れた出雲人形を紹介しておく。奈良県の方ならご存知だろうが、これは島根県出雲の人形ではなく、奈良県桜井市出雲に伝わる郷土人形で、現在桜井市のふるさと納税返礼品としても提供されている。「島根の出雲と紛らわしい」という理由で、好事家から「大和出雲人形」や「初瀬出雲人形」とも呼ばれる愛らしい人形である。この人形のルーツはおおよそ2000年前にさかのぼる。第11代垂仁天皇の後である

ひはすひめのみこと
日葉酢媛命の葬儀に際して、それまでの殉死の風習を改めて、生きた人間の代わりに土偶を埋納すべきと進言したのが出雲国から召喚された野見宿禰で、その作り手100人を出雲から呼び寄せて土偶の制作にあたらせたのがこの地であったため地名にも由来する、という壮大な故事がこの素朴な人形にはある。文字通り歴史の過酷な波に洗われて、モノは現在に伝わるのだと改めて思う。そして、言祝いで鈴を振る三番叟にあやかって、いずれの地域にも災害のないことを切に願う。



図1 「天保十四年」の刻印が見える天神の人形型背面 全高14.3cm
(水野氏蔵、岡下浩二氏撮影)



図2 出雲人形の三番叟 全高14.5cm
右手で鈴を振り、左手で扇を持つ姿が軽妙なおかしみを醸し出す。
(水野氏蔵、岡下浩二氏撮影)